



ポタンクサギ

92 編の端書きには詩人の名前はありませんが 賛歌。歌。安息日に と、特別に 安息日に と指定しています。

創世記の天地創造物語には 第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なされた。(創 2:2) とあり、7 日間を一巡りと認識したことから、暦が生まれました。当時は日没から日没までを一日と認識していましたので、安息日は第六の日の日没から次の第七の日の日没までです。すべてのものが神の安息に与り、神を祭るのです。働き人にとって、安息日があるということはなんという安息でしょう。

いかに楽しいことでしょう／主に感謝をささげることは／いと高き神よ、御名をほめ歌い

朝ごとに、あなたの慈しみを／夜ごとに、あなたのまことを述べ伝えることは

十弦の琴に合わせ、豎琴に合わせ／琴の調べに合わせて。(2-4) と、詩人は朝毎、夜毎、御名を呼び、感謝し 3 種類の琴に合わせて、賛美を歌います。礼拝が楽しくてたまらないのです。

続いて わたしは御手の業を喜び歌います。(5) と 御手の業 を賛美します。御手の業、とは、神の天地創造のプロセスと結果を指しています。その働かれた様子、仕上がりの様子を指し、いかに壮大で完璧で大きく、同時に細やかなものであるか、計り知れません。神は天地万物を順番に作られ、それを見て、良しとされた、満足なされた、と記されています。

続いて 御計らいはいかに深いことでしょう。(6) と 御計らい を賛美します。御計らい とは、神の天地創造の目的、意図を指しています。神は闇を光に、混沌を秩序に変えられました。それは 神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」(創1:26) と、神の似姿として人を造り、万物を支配させようとするためでした。神の品格を人間に与え、神の愛を人間に注がれたのです。被造物でありながらも、神と対峙し、神を愛し、他の被造物を愛する存在として、人間を創造されました。これほど光栄なことはありません。それなのに 御手の業 と 御計らい を知らず、悟らないものは愚かであり、さらに神に敵対する者、悪を行う者は必ず滅び、散らされると、神の裁きに言及します。

詩人の喜びは 神に従う人はなつめやしのように茂り／レバノンの杉のようにそびえます。(13) と益々大きくなります。信じられないほどの喜びも記します。白髪になってもなお実を結び／命に溢れ、いきいきとし／ 述べ伝えるでしょう／わたしの岩と頼む主は正しい方／御もとには不正がない、と。(15) 最後まで、安息日に、共に集い、この喜びを語り伝えようと願っています。

『讚美歌 21』の 143「主をほめ、主に感謝せよ」 <https://sanbika.blog.ss-blog.jp/2016-07-21> が 92 編を賛美しています。ハンガリーの修道士ミハリ・スタライ(1500?-1575)がプロテスタントに改宗し、多くの讚美歌を作詞し、おそらく旋律も彼のもので、1651 年出版の讚美歌集に収録されたものです。

ジュネーブ詩編歌は、ビオラ・ダ・ガンバ、バロック・チェロ、オルガンの気品に満ちた合奏です。

<https://www.youtube.com/watch?v=sfX05JbrUNM&list=PL15DF46D76CA72F5E&index=92>